23　役人から追われているは、意中の子分だけを連れて逃げようと考えたが、今まで苦労をともにして来たことを考えるとそのことが言い出せなかった。そこで忠次は、子分をりすぐるために入れ札を提案し、子分たちも納得した。以下の文章を読んで、後の問に答えよ。

〈岡山大〉　二〇一六年度出題

　からの経路を、一番な心で見ていたのはの九郎助だった。彼は年輩からっても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかった。が、忠次からも、子分からも、そのようには扱われていなかった。去年、大前田の一家とした入りのあった時、彼はから、不覚にも大前田の身内の者に、引っ担がれた。それ以来、彼は多年培っていた自分の声望がめっきり落ちたのを知った。自分から云えば、かに後輩の浅太郎や喜蔵に段々がれて来た事を、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟同様に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次までが、となく、自分を軽んじている事を知った。皆は表面こそ「！　阿兄！」と立てているものの、心のでは、自分を重んじていないことが、ありありと感ぜられた。

　入れ札と云う声を聴いたとき、九郎助は悪いことになったなあと思った。今まで、表面だけはともかくも保って来た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思うと、彼は厭な気がした。十一人居る子分の中で自分に入れてくれそうな人間を考えてみた。が、それは弥助の他には思い当らなかった。弥助も九郎助と同様に、古い顔であって、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グングン頭をげて来るのを、常から快からず思っているから、こうした場合には、きっと自分に入れてくれるだろうと思った。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中にることは考えられなかった。浅太郎には四枚入るだろうと思った。喜蔵に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚残る。その中、自分の一枚をのけると三枚残る。もし、その中、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中に加わることは出来るかも知れないと思った。が、弥助の他に、自分に入れてくれそうな人は、どう考えても当てがなかった。ひょっとしたら、並川の才助がとも思った。あの男の若い時には、かなり世話を焼いてやった覚えがある。が、それは六、七年も前のことで、今では「浅阿兄、浅阿兄」と、浅にばかりくっ付いている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚の他には、今一枚を得る当ては、どうにもつかなかった。子分の中ででもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざまざと表れることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。⑴不愉快な寂しい感じに堪えられなくなって来た。

　一本しか無い立の筆は、次から次へとって来た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ」

　ぼんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横に居た弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑った。それは、たしかに好意のある微笑だった。「お前を入れたぜ」と云うような、意味を持った微笑であるように九郎助は思った。そう思うと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなった。後の一枚が、自分の生死の境、栄辱の境であるように思われた。忠次に付いて行ったところで、自分の身に、いい芽が出ようとは思われなかったが、入れ札にれて、年もなく置き捨てにされることがどうしてもらなかった。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザマザと分かることが、どうしても堪らなかった。

　かれは、筆を持ってぼんやり考えた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

　横にっている浅太郎が、彼に云った。阿兄！　と云いながらも、語調だけは、目下をしているような口調だった。九郎助は、毎度のことながらむっとした。途端に、相手に対するしい競争心が――嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた。

　筆を持っている手が、少しブルブルえた。彼は、紙を身体でいかくすようにしながら、仮名で「くろすけ」と書いた。

　書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真中に置いてある空になっの蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、⑵苦い悔悟が胸の中にぐ起った。

「は打っても、なことはするな。男らしくねえことはするな」

　口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を［　Ａ　］ことが出来なかった。

　吉井の伝助は、だったので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

　皆が、札を入れてしまうと、忠次が、

「喜蔵！　お前読み上げてみねえ！」と言った。

　皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めていたが、それでも銘々、うぬぼれは持っていを見詰めるような目付きで、喜蔵のをんでいた。

「あさ、ああ浅太郎の事だな、浅太郎一枚！」

　そう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてそう叫んだ。

　又、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二、三年忠次の信任を得て、影の形に付き従うように、忠次が彼を身辺から放さなかったことは、子分の者が皆よく知っていた。⑶浅太郎の声がつづくと、忠次の浅黒い顔に、ニッと微笑が浮んだ。

「喜蔵が一枚！」

　喜蔵は、自分の名が出たのを、しそうに、ニコリと笑いながら叫んで、

「じゃねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次が又、喜蔵だ！」

　喜蔵は得意げに、又紙札を高く差し上げた。

「嘉助が一枚！」

　第三の名前が出た。忠次は、心の中で、に選んでいる三人が、入れ札の表に現れて来るのが、嬉しかった。子分達が自分の心持ちを、察していてくれるのが嬉しかった。

「何だ！　くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

　喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から［　Ｂ　］ように思った。生れて初めて感ずるような羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の裡がきむしられるようだ。自分のを、喜蔵が見覚えては、いはしないかと思うと、九郎助は立っても坐っても居られないような気持ちだった。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわっていなかった。

　「浅が三枚だ！　その次は、喜蔵が三枚だ！」

　喜蔵は大声に叫びつづけた。札が次々に読み上げられて、喜蔵の手にたった一枚残ったとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だった。嘉助と九郎助とが、各自一枚ずつだった。

　九郎助は、心の裡で懸命に弥助の札が出るのを待っていた。弥助の札が出ないことはないと思っていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思っていた。

　が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切って、嘉助に投ぜられた札だった。

「さあ！　みんな聞いてくれ！　浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思う奴は、自分で調べて見るといいや」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。

　誰も調べて見ようとはしなかった。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

　忠次は自分の思い通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上った。

「じゃ、みんなに落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は、一枚入っているから連れて行きたいが、云った言葉をすることは出来ねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえろう手間を取った。じゃ、みんな金を分けて銘々に志すところへ行ってくれ」

　子分の者は、忠次が出してあったうちから、銘々に十二両ずつを分けて取った。

「じゃ、俺達は一足先に行くぜ」忠次はまれた三人を、差し招くと、みんなに最後の会釈をしながら、頂上の方へぐんぐんと上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう」

　去って行く忠次の後から、子分達は口々に呼びかけた。

　忠次は、振り向きながら、時々、っているを取って振った。その長身の身体は、山の中腹を掩うている小松林の中に、くの間は見え隠れしていた。

　取り残された子分達の顔には、それぞれ失望の影があった。

「浅達が付いていりゃ、大した間違いはありゃしねい！」

　口々に同じようなことを云った。が、やっぱり、銘々自分が入れ札に洩れたしさを持っていた。

　が、忠次達の姿が見えなくなると、四、五人は諦めたように、草津の方へ落ちて行った。

　九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したままじっと考えていた。落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身にえた。札が、二、三人にまっているところを見ると、みんな親分の為を計って、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心をんで、浅や喜蔵を選んだのだ。そう思うと、自分の名をかいた卑しさが、堪えられなかった。

　朝の微風が吹いて来て、入れ札の紙が、を離れて、ひらひらと飛びそうになった。

「ああ、こんなものが残っていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」

　そう云いながら、九郎助は立ち上って散らばっている紙片を取り蒐めると、めちゃめちゃに引きちぎって投げ捨てた。⑷九郎助の顔は、いほどにかった。 （菊池寛「入れ札」による）

注一　出入り＝喧嘩のこと。

注二　矢立＝江戸時代に使われた、携帯用の筆記具。

注三　割籠＝弁当箱。

注四　壺皿＝博打で、さいころを入れて伏せるのに用いる器。

問１　空欄Ａ・Ｂに適切な語句を入れ、「顔」に関する慣用的な表現を完成させよ。

問２　傍線部⑴について、なぜそのような気持ちになるのか、分かりやすく述べよ。

問３　傍線部⑵について、「苦い悔悟」とは何か、分かりやすく述べよ。

問４　傍線部⑶について、この時の忠次の気持ちはどのようなものか、述べよ。

◎問５　傍線部⑷について、九郎助のどのような心情がうかがえるか、分かりやすく述べよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ＝上げる　Ｂ＝火が出る

問２　九郎助はＡ最年長の兄分でありＢ忠次の第一の子分である自分がＣ入れ札に落ちて人望のなさが露呈するであろうことをＤ屈辱的に思ったから。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝３／Ｄ＝３

問３　Ａ頭角を現しつつある浅太郎に対する競争心や嫉妬からＢ体面を保つために自分の名前を入れ札に書いたが、それはＣ卑怯を嫌う忠次の教えに背く行為であることにＤ瞬時に気づいたためにＥ後悔しているということ。

Ｅがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝１／Ｃ＝３／Ｄ＝１／Ｅ＝３

問４　Ａひそかに選んでいる三人のうち最も信頼する浅太郎の名前が続くことに安堵し、またＢ子分達が自分の気持ちを察してくれていることがわかり嬉しい気持ち。

Ａ＝５／Ｂ＝５

問５　Ａ他の子分達は忠次の意を汲んで、入れ札に臨んだのに、Ｂ九郎助は、自尊心を保つために卑怯なまねまでしたのだが、Ｃ結局自分には自分で書いた以外一枚も入らず、そして、Ｄ他の子分達は、自分の名がなかったことを淋しく思うだけで、九郎助が選ばれなかったことさえ、気にかけていないことで、Ｅ一層の人間性の卑小さや浅ましさを思い知らされている心情。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝１／Ｄ＝１／Ｅ＝４